

県南思考 Vol.19

特集：どう確保する？市民の足

仕事に向かう、買い物に出かける。私たちは外出するとき、あたりまえのようにクルマを使っています。病院に通う、首都圏へ遊びに行く。日々の暮らしはクルマがなくては成りたちません。しかしその一方で、お年寄りや体に障害を持った方など、さまざまな事情でクルマが持てない、あるいは使うことができない人たちがいます。公共の交通網が整備されている首都圏と違い、南房総エリア、とくに中山間地域などでは問題は深刻です。それが、いわゆる「交通弱者」問題。市民の日常を支える足をいかに確保するか。今号は、そこにスポットを当てお届けします。



特集：どう確保する？市民の足

結びの対論

亀田県議 × 木下県議 × 三沢県議

南房総特有のお互いを思いやり、
支え合う地域性を生かしながら
3市が協力していく姿勢が必要ですね。

亀田 今日は「交通弱者」をテーマに、主に南房総市で取り組みを見てきたわけですが、考えてみると、ふだん我々も公共の交通機関はまず利用しませんね。

三沢 以前、バスを使うとどれくらい時間がかかるものなのか、実験的に事務所から南総文化ホールへ行ってみたことがあるんです。クルマだと、わずか15分くらいで着けるところが、乗り換えを入れると、とんでもなく時間がかかってしまって、なるほどクルマを使うわけだと痛感しました。

亀田 それでも館山市は駅を中心に主要道路をバスが縦横に走り、3市のなかでは整備されている方ですね。

三沢 いま9路線走っているんですが、不採算路線に対しては国や県、市など、さまざまな公的支援を行って赤字分を助成し、市民の足の確保につとめています。

木下 むかしは千倉にも定期的にバスが運行されていて、駅前からバスが出たり、白浜から館山までバスが走っていたんですが、しかしそのピークが昭和45年で、その頃からすでに衰退が始まっていたというのを今日知って、驚きました。

亀田 どの自治体も路線バスの維持には力を注いでいて、今日見たデマンドバスなどはその代表的なケースでしょう。

木下 南房総市ではご高齢のバス利用者に対して補助券なども発行し、それがけっこうな枚数になっていて、利用客確保にひと役買っています。

三沢 館山市でも民間による免許返納者のためのタクシー、バス優待券が配布されています。また、これは「交通弱者」という問題からやや外れるかもしれませんが、今年から市では小・中学生のスクールバス料金が無料になりました。市民の足を確保するという意味で、ひとつの成果と考えています。

亀田 お年寄りの外出理由は、やはり通院と買い物メインになるんでしょうか。

三沢 買い物に関して言えば、以前はどんな場所でも雑貨屋や小さなお店があって、簡単なものは手に入っていたんですが、大型店ができた結果、なくなってしまった。

木下 駅前の商店街が客を奪われて寂れ、シャッター通りと化しているのも同じ理由によるものでしょう。

三沢 ただ、街中だと多少歩けば何かお店はありますが、中山間地域などでは、どうにもならない。ましてやお年寄りだと死活問題。

木下 巡回スーパーなども最近はありませんでしたね。ガソリンを使って山間部へ入っていても、お客さんが少なくて採算が取れないんでしょう。

亀田 子どもや孫でもいればクルマで連れて行ってもらえるんで



しょうが、核家族化が進んでお年寄りだけの世帯などでは、外に出ることができない。

木下 それは何も南房総に限った話ではなくて、首都圏でも団地や新興住宅地などでバス路線が廃止されると、いわば陸の孤島となってしまう、住民が「ネギー本買うのもタクシーを呼ぶ」といった、笑えない話が現実には起きつつあります。

三沢 だとしたら、今日見てきた「そら豆バス」などは、なおさら貴重ですね。市民の間から自然に発生したアイデアで、そこにはお互いに支えあおうというコミュニティの精神が働いている。

木下 いま世界中の自動車メーカーが競い合ってクルマの自動運転を開発しています。もしも実用化されれば、お年寄りがコンパクトカーに乗って自宅から好きな場所に移動することも可能になるはず。

三沢 大型車両があふれ常に渋滞している首都圏と違って、すれ違うクルマも少ない山里なら、むしろ実用化が早いかもしれませんね。

木下 現に昨年の11月に、愛知県設楽町でお年寄りを乗せた乗用車、秋田県仙北市で小型シャトルバスの公道走行実験が行われ、ともに成功しています。実用化目標が2020年といえますから東京オリンピックの年。夢物語ではなくなってきました。

亀田 山間部で暮らしていれば、周囲に畑があるので野菜などは困らないでしょうが、それ以外の生活の日用雑貨はやはり必要ですからね。

木下 医療や介護のケースでは送迎も行われ、ある程度、システムが整備されていますが、買い物となると、それは個人的な用事ということで切り捨てられがちです。ただ、生活を支えるという意味では同じはずなんですよ。

三沢 交通弱者はむずかしい問題で、なかなか一朝一夕には解決しないかもしれませんが、やはりコミュニティの持っている潜在的な力をベースに、うまく行政とリンクさせ、皆で知恵を出しあっていくことが必要ですね。

亀田 さて、最後にひとこと。私ごとになりますが、亀田はこのほど一身上の都合から県会議員の職を辞することになりました。初当選以来ほぼ10年にわたって活動が続け、「県南思考」などの紙面を通じ、さまざまな問題をお伝えしてきました。今後も別の形で県南のために力を尽くすつもりです。市民の皆さまありがとうございます。

三沢 今回のテーマもそうですが、防災、医療、観光などは、単にひとつの自治体だけでなく、館山市、南房総市、鴨川市が連携していくべき問題です。その意味で、これまで以上に力を合わせて取り組んでいきたいですね。

木下 敬二（きしたけいじ）

南房総市・安房郡選出
昭和23年5月17日生まれ



事務所 / 〒295-0005 南房総市千倉町牧田 164-1
TEL: 0470-44-4111 FAX: 0470-44-4112
http://kishitakeiji.com/
e-mail: info@kishitakeiji.com

亀田 郁夫（かめだいくお）

鴨川市選出
昭和27年2月16日生まれ



事務所 / 〒296-0041 鴨川市東町 665
TEL: 04-7099-0190 FAX: 04-7099-0191
http://www.kameda190.com/
e-mail: ikuo-k@leaf.ocn.ne.jp

三沢 智（みさわさとし）

館山市選出
昭和29年11月14日生まれ



事務所 / 〒294-0037 館山市長須賀 470-1
TEL: 0470-22-3051 FAX: 0470-22-3052
http://三沢さとし.com/
e-mail: office@misawa-satoshi.com

県南思考 Vol.19

発行：2017年1月14日
制作：「県南思考」制作委員会
編集：式守編集工房
発行：野村友紀

南の風を県政に。南房総選出の県議による「県南思考」は市民の皆さまと共に県南のあるべき姿を追い求めていきます。本誌をお読みになった感想、ご要望、その他ご意見は各県議の事務所までお気軽にお寄せください。



特集：どう確保する？市民の足

市民の足を確保すること。 それは、南房総に住む人たちの 日々の暮らしの質を確保すること。

南房総市富浦地区にある道の駅「おおつの里」。

駐車場にとまったワゴン車に次々と近隣のお年寄りたちが乗りこんでいきます。買い物に出かけるので、皆さんおしゃれをして楽しそうです。

これは同地区に住む福原好喜さんが主催している「そら豆バス」。

周辺はバスも通らない交通空白地域で、日常の買い物にも不自由し、思うように外出できずに引きこもりがちなお年寄りたちの様子を見かねて声を掛けあい、3年前からスタートさせました。

耕作放棄地にそら豆を育て、得られた利益をガソリン代にあて、自分たちのクルマにお年寄りを乗せて館山市の中心まで運んでいます。

「コースは、まずスーパーでお買い物をし、それから診療所へ回って健康チェックを受ける。毎月 2 回ですがこの外出を皆さん楽しみにしていて、車中でお菓子を食べたり、まるで遠足のようなんです」と、福原さん。

利用者のおひとりとは、「お野菜なんかは畑で作ったりご近所からいただいたりできるけど手に入らないものもあるでしょ、お肉とか、お魚とか。卵なんかも買ってこれるので助かってるんですよ」

背景にある核家族化

「交通弱者」という言葉があります。クルマなど、自家用の移動手段を持たないため、日常生活に不自由を強いられている方たちを指して用いられます。

クルマ社会が発達した結果、それまで地域の移動手段をになってきたバスの利用者が減り、本数が減った結果、ますます利用者が離れるといった悪循環が発生。なかには廃線に追い込まれる路線も出て、

自由に外出できない人たちが急増しています。

昔のように子どもや孫など家族と同居していれば別ですが、核家族化が進んだ結果、お年寄りだけの世帯が増え、切実なケースも生まれてきました。

その対策として、各地の自治体でさまざまなシステムが導入されていて、たとえば冬の味覚、間人ガニ^{ないど}で有名な京都府の京丹後市では、2016年5月にNPO法人による「ささえ合い交通」がスタートしました。

これは高齢化率40％と、過疎化^{ゆうしやう}に悩む同市が実証実験として始めたもので、一般の自家用車で市民や観光客を有償で運ぶサービスです。

事前に登録されたドライバーが仕事や家事の合間にスタンバイ。利用者はスマートフォンなどを使って乗車を依頼し、目的地まで運んでもらうシステムです。

もともとこの考え方は相乗りを意味する「ライドシェア」といって、欧米では広く浸透していましたが、わが国では「白タク」として禁止されてきました。

しかし、バスはもちろん、十分なタクシーも確保できない交通空白地では特例として認められ、外国人客を地方に呼び込む有効な手段としても注目されています。



◀久しぶりの買い物で車内には笑顔があふれ足取りも自然と軽くなる。ついつい「爆買い」
▲このそら豆畑が支えている。お年寄りも草抜きをするなど皆で維持している「そら豆バス」のシステムについて代表者の福原さん（左から2人目）から説明を受ける3県議。

通院、買い物など生活に支障

「交通弱者」がクローズアップされているのは、買い物や通院といった、ごくあたりまえの生活が維持できなくなってくる怖さです。

そこで、南房総市では、高齢者を対象にしたバスやタクシー利用の助成券を発行。また、市内を循環する富浦線／富山線にデマンド・システムを採用しています。

デマンドバスは利用者があらかじめ電話をして乗車するもので、「運行路線上では乗降を自由にして利用者の利便性を高めています。その一方で、



デマンドバス「富浦線」に乗車し車内で利用者の方にお話をうかがう



予約がなければ運行を休止します。無駄をはぶくためで、少しでも長く路線を確保するために、この方法を取っています（同市／企画財政課）」

クルマを使った送迎も行われています。館山市内の中心地にあるクリニック。その駐車場にとまっていた1台の福祉車両に患者さんが乗り込みました。これから南房総市三芳のご自宅へ帰ります。

運転しているのは市民ボランティア。南房総市の社会福祉協議会が実施している移送サービスで、高齢者や障害を持った方を対象に、通院、買い物、金融機関への立ち寄りなど、日常の用事を支えています。

「サービスは、主に近距離はホームヘルパーがおこない、鴨川の亀田病院に行くなど長い距離は移送サービスのボランティアにお願いしています。利用者から予約が入ると、登録されている中から対応可能な方をお願いし、移送にあたっていただくシステムになっています」



南房総市におたずねします。

「交通弱者」はなぜ増えているのでしょうか。その背景や今後の対策などについて南房総市役所をたずね、担当者にお話をうかがいました。

南房総でも増加する交通弱者 その背景から解説してください

理由はいくつか考えられますが、まずモータリゼーションの進展があげられます。南房総市のクルマの所有台数は1世帯あたり2.4台。ひとり1台とまではいきませんが、ほとんどの方が所有していて、クルマで用事をこなしています。その結果、公共交通の利用者が激減しました。バスを例にとると、南房総地域の場合、ピークは昭和45年で、当時、営業距離の総延長が320キロ近くありましたが、路線の短縮や廃止によって、現在では、ほぼ半減しています。また地方交通のバス路線は、地域住民に加え、観光客などの来訪者によって下支えされてきた側面がありますが、仲間でシェアできる割安なレンタカーなどへ移ってきたことも一因としてあげられます。市としては、運行系統の見直や本数を間引くなど、バス路線維持の努力を続けてはいますが、交通空白地域が増え続けているのが現状です。

買い物もままならない、とお年寄りたちが困っています

いま、地方を旅すると、どの郊外も景観が全く



クリニックで患者さんのお迎え。主に社会福祉協議会が所有するクルマを使うが、個人のクルマで移送する場合は「有償運送車両」と表示して走行している

と、同協議会事務局長の吉田氏。事前に講習を受け保険にも入るなど、安全に配慮した運営が行われています。

誰にでも起こりうる問題

引きこもりがちな高齢者が外出することは、積極的に外の世界とコミュニケーションをはかる大切な要素です。

買い物ひとつとっても、自分の目で見て商品を選ぶことは楽しみであり、もしもそれが自由にできなければ、食生活の貧困だけでなく生活の質の低下まで招くことになります。

つまり、交通弱者を救うことは、地域の人たちの暮らしを救うことにもなるのです。

自分には関係ないと思っていても、いずれ年を重ね、身体が自由が効かなくなれば、クルマを手放さざるを得なくなります。

国が高齢者免許の返納をすすめていることもあり、誰でも「交通弱者」の仲間入りをしていく可能性があります。

だからこそ、市民それぞれが自分の問題としてとらえ、取り組んでいくことが、いま求められているのです。



南房総市が発行している高齢者外出支援のバス助成券とタクシー助成券。ともに降車の際に提示して差額分を支払う仕組み



（左から）三沢県議、木下県議、亀田県議、南房総市総務部／西宮恒夫氏、保険福祉部健康支援課／小高仁氏、健康支援課高齢者福祉係／尾形美紀氏、総務部企画財政課／鳶田紀之氏、同／白井寛太郎氏

27年度の実績で、バスは延べ20515枚、タクシーは延べ2873枚発券し利用されています。「そら豆バス」は地域にとっても重要なので、今年から交付金の給付を始めました。今後の根本的な対策として、南房総地域の公共交通の方向性を提言していくマスタープラン（基本計画）をまとめました。ただ、この問題に関しては、南房総市だけで完結するわけではありません。バス路線などは市をまたいで運行されており、隣接する市との連携が必要です。鴨川市はすでに同じようなプランを策定し、担当者レベルですり合わせも始まっています。今後は館山市にも働きかけ、南房総全体としてこの問題をとらえ、地域で支え合う仕組みを探っていきたいと考えています。

■足の便がなくて困った時の対策■

（南房総市地域公共交通網形成計画より）

家族にクルマで送ってもらう	47.2%
タクシーを利用する	20.9%
歩くか自転車を利用	19.1%
近所の人にクルマで送ってもらう	16.4%
外出をあきらめる	12.0%
不明/その他	13.7%